

『郷に入っては郷に従え』

「When in Rome, do as the Romans do」というが、物事はそうシンプルではない。万能ルールは存在しない。ローマにいても、ローマ人ではない人と一緒にいる時は？ローマ人 Romans とそうでない人が混ざっている時にはどうすれば良い？シンプルな挨拶ひとつであっても、時には困惑を伴うものになる。

私は日本で生まれ、成人するまでずっと日本で育った。東京近郊で日本の公教育を受け、日本以外の場所にルーツを持つ人と密にすごした経験は持たなかった。そんな私が成人してからは留学や仕事の都合で、中国など幾つかの国で暮らしたが、挨拶に困惑することはなかった——フランスに行くまでは。

挨拶の習慣という点からいえば、フランスと、日本をはじめそれまで私が経験した場所との最大の違いは、身体的接触だった。ご存知だろうか。フランスでの基本的な挨拶は「ビズ」と呼ばれる。頬と頬をあわせて唇でキスの音を出すというのが基本形だが、ハグを伴うか、何回するか、本当に相手の頬に唇をつけるか音だけか、というのは地方や関係性によって異なってくる。私がフランスで初めて暮らした地方は、単なる知り合い同士や急いでいる時には1回、もう少し仲良くなって友だち同士なら2回という場合が多かった。地方によっては4回という場合すらあるそうだ。この「ビズ」は、会ったときと別れる時の両方にする。「こんにちは」や「おはよう」、「またね」のすべてに伴う。

この挨拶は、特に慣れないうちには、相手の顔が至近距離に近づいてくることが相当に照れくさかったが、親近感の増すのが感じられて嫌じゃなかった。ところが、ローマにいても——もといフランスにいても、相手が日本人であれば、私には決して、積極的にはこれができなかった。日本で育った我が身にとっては、「ビズ」の身体的距離は、恋愛の相手だけという感覚がある。しかも強烈な、周囲のまったく目に入らないほどの熱愛の真っ最中という感じ。日本にいた時は、「ビズ」ほど他人と顔と顔を近くすることは、人前では慎むべき行為だと捉えていた。「ビズ」に対するこんなイメージは、現地で仲良くなった他の日本人もある程度共有していたようで、フランス人と日本人が入り混じる場では、フランス人とフランス人、フランス人と日本人との間では「ビズ」が行われるが、おなじ場においても日本人間ではそれが無い、という妙なことになった。

話がさらに複雑化するのは、フランス人でも日本人でもない人という時だ。ひとつ、強く印象に残った経験を紹介したい。

当時私は、一週間に一度、ある趣味の集まりに参加していた。その集まりにはフランス人も参加していたものの、私をふくめ大多数が外国人だった。多くはヨーロッパ人だったが、中国人も数人混じっていた。韓国から来ていた人も1人。それから私。皆が集まると、ややぎこちないながらも、ほとんどあらゆる組み合わせで「ビズ」が行われた。ローマ人sの——もとい、フランス人のする通りにしたわけだ。私が他のアジア人とする「ビズ」は、ヨーロッパ人とするよりもちょっとためらいがちになった（相手も同様であるように感じられた）けれど、日本人との「ビズ」ほどの抵抗感は無かった。ほとんどあらゆる組み合わせで、と書いたのは、中国人同士での「ビズ」は見かけなかったからだ。あちらさんも同様（私が日本人とできないのと同じ）なのね、と思っていた。

ある日の昼さがり、地元の県庁で、滞在許可証の延長手続きのために待っていると、その集まりで顔をあわせる中国人のひとりが入ってきた。彼も同様の手続きがあるらしかった。私たちは偶然に驚き、「こんにちは」「ごはん食べた？」など言いながら、いつものように「ビズ」をした。私のほうが先に呼ばれ、手続きが終わって出てきた時に、彼はまだ待合室で自分の順番を待っていた。私たちはもう少しお喋りをしたが、そのうちに彼の名前が呼ばれた。その場の「普通」にしたがえば——現地の通常ルールの通りとしても、私たちの集まりでしていた通りとしても、あるいは私たちふたりが十数分前に会った時の通りとしても——「ビズ」がなされるべき場面である。だが、私たちはそれをしなかった。一瞬のためらいのあと、どちらからともなく身を引いて、シンプルに「じゃあ、また」と言って別れたのである。

なぜ、会ったときには「ビズ」をして、別れる時には「ビズ」をしなかったのか。私に考えられる合理的な理由はひとつしかなかった。言語だ。私が手続きのために呼ばれる前には、私たちはフランス語で話していた。しかし、手続きが終わった後には、私たちのお喋りは中国語に移行していた。彼が待ち時間に読んでいた、中国語で書かれた本の話題で盛り上がり、そうなると中国語のほうが使いやすかった。

同じ場所で、同じふたりが、フランス語を使う時には「ビズ」をして、中国語を用いる時にはそれをしない。それは、あたかも、どのように振る舞うのが適切なのかということについてのそれぞれの判断が、場所よりも使用言語によって影響を受けたかのようだった。さらには、同じく使用言語を通じて、「私たちはいまこの場でどんなルールに従おうか？」ということに関して、暗黙の相互理解がなされたのだ、と今は思っている。